NTS物語

❸ ビジネスモデルの確立へ向けて（第30回）

3－1編集企画体制への道（2）

出版事業②「ハンドブック」を作る ⑥『現代おさかな事典』（中）

代表取締役　吉田　隆

「現代おさかな事典」の㈱水土舎への本文の執筆依頼を断念してほどなく、本間昭郎先生は私を連れて、㈱日本海洋生物研究所（品川区）まで自ら足を運び、岡健司社長をご紹介下さった。岡社長は、執筆者に同社真木長彰氏（現、アルファメディア代表取締役）を推薦された。すぐに見積交渉を始めたが、仕事の性格が調査ということに変わりはなかった。何度かの話し合いの末、ようやく折り合いを付けることができたが、本文だけで当時の金額で800万円に上ったため、最終的に2000万円を超える経費負担が予想された。本書は自然系書籍ということもあり、高額図書にはできないと考え、総経費も500万前後を予定していたこと、そのため㈱水土舎に依頼することを断念したことは前号で述べた。ここに至っても、まだ私は本を出すべきかどうか迷った。ある日、山本店主と電話のやりとりをする中、そんな私の煮え切らない態度に業を煮やし「おれ、もう辞めたよ！」といって背中を向かれてしまった。事態の改善を図るために、本間先生と話し合いを重ねる内に、ようやく腹をくくる気持ちになった。確か1994年の3月の日曜日のことだったと思うが、私は、池之端にある山本店主のご自宅まで足を運び、中途半端な態度を詫び、制作に向けての私の決意を伝えた。それから、編集チームに真木氏を加え、事典作りは本格的に動き出した。93年夏のスタートから半年が経過していた。

●点描画

編集制作担当には、○○○○（現、㈲ブッカーズ代表取締役）を指名した。まずは、縦版か横版かを検討した。魚の姿に自然でありたいという伊勢の意向を取り入れ、横版にヒット作無しの業界常識にあえてチャレンジすることにした。次に点描画に取組んだ。阿部先生から、著作権の制限の無い、米国・英国夫々の古典の名著をお借りしたが、いきなり難題にぶつかった。いずれの著作にも編集会議で選んだ400種が網羅されておらず、両者を合わせても不足する魚種があった。これでは、タッチの異なる、統一性のない線描画の掲載となり、見栄えが甚だしく悪くなる。少し調べれば、スタート時点で分かっていたはずのことだが、古典の流用という、芸術的にも経済的にも本書推進の最も強い動機部分を、はなから手放す事態となった。古典に見劣りしない細密な点描画を、誰に頼めばいいか思案した。実は、1993年は、講演録事業がスタートした年であり、同年9月にイラストレーターとして登録した二人の男性がいた。その内の一人、横山伸省氏がこの困難な仕事の大部分を引き受け、もう一人の小林廣政氏が横山氏をバックアップする体制で臨んだ。以来、3年半の間、横山氏は築地魚市場に何度も足を運び、途中、大病を患った時期にも病床で仕事に勤しみ、この大仕事を完成した。こうした職人気質（かたぎ）の人たちの存在を、出版社はもっと大事にすべきであり、発見、育成に務めるべきではないだろうか。しかし、経済的には、また大幅に目算が狂ったことは言うまでも無い。こうして、本文と点描画という本書の核心部分が軌道に乗ったものの、事実関係の調査や表現の壁に何度も突き当たる中で遅延を重ね、発刊の見通しが不透明なものとなった。

●デザイン戦略

1995年秋口から、ブックデザインの検討を始めた。美しい点描画やカラー口絵、美味しそうな料理写真とくれば、全体のデザインもそれなりのレベルを、と考えるのは自然の成り行きである。丁度、そのころ、資生堂デザインフォーラムでお世話になっていた㈱資生堂宣伝部コンピュータデザイン部門長の○○○○氏（現、㈱ミラコム代表取締役・Web広告研究会メディア委員長）にデザイナーをご紹介いただくことにした。一流のデザイナーをという私の希望に、○○氏が推薦されたのが同社宣伝部アートディレクター山形季央氏である。山形氏は、同社において、1982～86年のパリ駐在時、色彩の魔術師と謳われた世界的な天才クリエーター、セルジュ・ルタンス氏とのコラボレーションで名を成し、現在も資生堂のグローバルイメージのためのアートディレクションを行う、日本を代表するグラフィック・デザイナーの一人である。山形氏とは、1996年2月に初めてお会いして以来、発刊まで2年近いお付き合いとなった。その仕事振りについては、次号でお伝えしたい。

●社長の道楽？

さて、スタートから3年半ほど経過した97年春頃になると、本書の制作費が次第に収益を圧迫し始めた。本文の完成も遅れに遅れる中、メインバンクも本書の行く末に無関心ではいられなくなった。ある日、メインバンク主催のツアーに参加した折、夜の懇親会で支店長から“あれは社長の道楽ではないのか？”と笑顔ながら揶揄（やゆ）された。その場は“道楽ではありません。必ず売れます”と答えたものの、支店長の言葉とあって事態の深刻さを知った。“チャレンジ”と“ビジネス”の、際どいバランスの波間を漂う“現代おさかな事典”であった。

◉編集後記

ジューンブライド、6月は家庭の守護神ジュノーの月であることから、この月に結婚した女性は幸福になるといわれている。日本では給料の三倍と言われている婚約指輪の代金。「毎年、結婚記念日には一回りづつダイヤを大きくしてあげる」そんな言葉が、夫のプロポーズだった。　結果、指のサイズのみがどんどん大きくなっていってしまった。ダイヤといえば元素記号では「C」、炭と同じだなんて思ってしまう。今回インタビューでお世話になった岩木先生も材料としてのダイヤがお好きとのこと。古今東西、老若男女を問わずダイヤは人の心を魅了するのだろうか？　私も、せめて瞳だけはダイヤの輝きを持ってなどと思っている。（あしだ）

◉編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

〒113-8755　東京都文京区湯島2-16-16　㈱エヌ・ティー・エス「NTSニュース」係
FAX：03-3814-9152　E-mail：k-kunimoto@nts-book.co.jp

NTSニュース
2004年6月号（通巻64号）
2004年5月25日発行